

都市をつくって、まちをつくらず

たむら あきら
田村 明

法政大学名誉教授、都市政策プランナー

一九二六（大正十五）年、東京に生まれる。東京大学工学部・法学部卒業。運輸省、日本生命、環境開発センター等を経て横浜市に入庁。横浜市では、MM21、ベイブリッジ、港北ニュータウン、地下鉄、高速道路など、現在の都市の礎を築いたプロジェクトを民間で提案、市に入りその推進役を果たした。ひらがなで「まちづくり」と最初に表現した人である。「まちづくり」は、今や都市や地域のハード・ソフト双方の開発や、そのための市民が主役の活動を指す言葉として定着したが、「日本人は物質的な都市はつくったが、まちをつくらない」と振り返る。著書は『都市ヨコハマをつくる』『自治体学入門』など。

国と闘い、新しいまちの姿を追求した田村さんは今もエネルギーシユだ。欧米に追いつけ、追い越せで「早く、便利に、安く」が目標だった時代に「まちづくり」を言い出し、単なる理想論としてではなく、横浜で実現した人なのだ。

市民不在のまま決まる都市計画、無視される都市景観、現実への批判はやむことが無い。若い時から専門を究めることより総合的であることを目指した。自分がやるべきことは何かを考え続け、終身雇用が当たり前の時代にあつて何回も転職する。様々な経験を経て都市プランナーの道に入ったのが三十五歳を過ぎてから。横浜は田村さんが一市民として住み、現地を知っている場所である。机上の都市計画で済ませるわけにはいかない。その思いが、横浜のまちづくりに活かしている。

田村さんは組織や人をよく知っている。高い理想を掲げたビジョンを実現するためには、闘うだけでは実現するはずも無く、多くの人を動かす必要がある。プランナーは実際のコトを実現しなければ意味がない。部下を鼓舞して、組織を動かし、自治体の総合力を発揮し、道路の地下化という最大のハードルを越える。そして、今ようやく日本の国のまちづくりは田村さんが思い描いた方向に舵を切った。しかし、田村さんは「都市に完成はない」と言う。

だから、田村さんの闘いは終わらないのだ。

自分の環境に関心を持つ市民、自分以外のことに関心を持つ市民の存在が何より大事だと、二十一世紀を飛び越えて二十二世紀の都市を考える人は熱っぽく語る。この熱い思いを次に引き受けるのは私たちだ。施設の塊でない本当のまちをわたし達は作れるだろうか。田村さんの問いは私たちに向けられている。

自由に総合的に考える

僕が三十年、四十年前に始めたことが、今やっと当たり前になっているんです。例えば、市民参加とか都市を美しく個人的にするとか、ましてアーバンデザインなど「とんでもない」と言われたんですよ。当時と今とでは百八十度価値観が違います。

三十年以上前の価値観が今とは全く異なる時代に、なぜそういう発想ができたのか。それは僕がいゆる正統派じゃないから、自由に総合的に考えることが可能だったのです。例えば、どこかの官庁や大学にずっといけば正統派です。正統派はその世界の固定観念の中にはまり込んでしまうから、問題を自由に考えられないんです。一回しかない人生、わかり切ったことをやるのではつまらない、もっと自由に発想できていいんじゃないかと思っただけです。総合性は、

やはり自由度からしか生まれえない。

僕は理系も文系もやったし、いくつもの中央官庁に入って、民間も経験した。新幹線もテレビもない、電話も通じない時代に東京から大阪に来て、全然違う文化に触れた。そういう意味で立体的なものごとを見るのが身についたわけです。それが新しいものを生み出すきっかけになっていると思います。

「都市計画」というとある決まった範囲に限定されてしまうから、僕はもっと自由にハードもソフトも含めて、民間の力も入れてやろうという意味で、ひらがなの「まちづくり」という言葉を使ったわけです。

都市に完成はない

僕自身はデザイナーではなく、プロデューサーの役割を持ったプランナーだと思っています。デザインは感覚八割で勝負する世界ですが、僕は感覚ではなく、理詰めなんです。ただし、理屈だけだと必ずけんかになります。民間から横浜市に入ったわけですけども、毎日毎日、決まり切った考え方のやつと大げんかです。評論家なら一人で「こっちが正しい」と言っていればいいけれども、ものごとを実現するためには反対するやつを説得するかうまく誘導するかして、僕の言うことをやってもらう必要がある。相手は人間だから、感情をうまく使わないとい

けないのです。価値観が全く異なる時代ですから、あの手この手がないと相手は動きません。

いちばんの問題は部下なんです。自分一人で方々駆け回り回るわけにはいきませんから、部下たちをその気にさせて、ある程度まではやってもらわなければなりません。そのためには「全体会議」とか「目標会議」とか「大テーブル主義」とか「情報共有」とか、いろいろな手法を使いました。僕はいろいろな組織を経めぐってきているから、人に使われるということがどういふものかよくわかっている。どう人を動かすかということが、本当は僕のいちばんやってきたことです。

横浜では六大事業も完成したし、アーバンデザイン・チームもつくったし、ほぼ基盤はできたわけです。でも、建築や事業には完成があるけれども、都市に完成はないんですよ。都市は永久に生きて、動いているものなんです。だから、それを一人の人間が永久につくり続けるなんてことはできないのです。ただ、僕には横浜ではいつの時代にも対応できる組織やシステムをつくったという自負がある。みなとみらい21やベイブリッジと違って目には見えませんが、そのシステムがいちばんです。

残念なのは、その都市を生かしていくいちばんのしくみが、今はあまり働かなくなってしまうことですね。

守りに入らず、ポジティブに生きる

「ピーターの法則」というのをご存じですか。「組織の人間は昇進に従って無能化する」というものです。官庁でも民間でも「ピーターの法則」は当てはまるんです。選挙で選ばれる首長はちよつと違うのですが、一つの組織に長くいると、ある意味で無能化してくるんです。僕は、今までピーターにならないで過ごせたのは良かったと思っています。

大学の先生になってからも、守りに入って講義だけしていたわけではありません。自治体学会をはじめ僕はいろんな会をこしらえています。それも一種の「攻め」なんです。今年になってからでもいくつも新しいことを始めています。

例えば、これは僕が仕掛けたとは言えないんですが「横浜にLRT（次世代型路面電車）を走らせる会」。それから、今年の四月から「横浜市政調査会」という財団法人の理事長になりました。これは横浜の名前を冠していて、半世紀の歴史があるのですが、お金がなくて悪戦苦闘しています。今年の四月には「日本の未来をつくる会」というNPO法人をつくって、東京湾の総合的管理機構、東京特別市、日本海の自由交流都市といった、日本の国土計画を超えたいろいろな提言を民間からしています。

この歳にして、あちこちで新しいことをやっているんですよ。ポジティブにやらないで、ただのんびりしていようという気持ちには、どうしてもならない。行きたいところに行くし、やりたいことはやる。

人間と自然の中に都市がある

僕はとにかく海外に行く。このあいだアフリカに行ってきたんですが、今度は中央アジアに行こうと思っています。出かけて何になるわけでもないけれども、とにかく出かけるんです。人間が何をやらかしているか、見ておきたい。それが僕のを考える場合の発想のヒントになるからです。

僕が変なところに行くと、「そんなところに都市がありますか」と聞かれるけれども、都市がなくても、自然があつて人間がある。かつては自然の中に取り囲まれて人間がいたわけですが、だんだん人間が自立して自然に関わり出して、人間の営みを始める。その営みがかなり集約的に現れたものが都市であつて、いきなり都市ができるわけではなく、自然の中での人間の営みとして多様な人が集まり、都市ができる。そうすると、人間のことも自然のことも知らなければならぬ。単なる知識ではなくて、やっぱり現場に行くと感じるんですよ。

僕が最初に海外旅行したのは昭和三十年代の末ですが、その頃は海外に行くのは最初で最後と思えましたよ。それから見るとあまりにも変わった。国境の壁が減り、交通が便利になっ

て、経費が安くなった。それで良くなった面と、本当にこれでいいのかという面があります。今はあまりにも世界が一体になっていて、グローバルゼーションなんて簡単に一言で片付けられる問題ではないのではないか。

もう一つは、今は世の中がバーチャル化してしまって、実験ではない浮遊的なところがだんだん現実化しているでしょう。僕が行ったアフリカの、所得が日本の三十分の一というような国でもケータイを持っていきますよ。でも、これだけ便利になったインターネットやケータイをやめるわけにはいかないが、実験的なものもうちよつと重視しないとイケません。

自由な人間がいないと「まち」はできない

僕は「ムラ」に対して「まち」と言っているんですけども、日本人はまちをまだつくっていないんですよ。十万人でもムラなんです。僕のいちばんのテーマはまちをどうやってつくるかなんですよ。

日本人は施設の塊を都市と呼んでいるけれども、本当はまちが入っているのが都市なんです。物質的な意味での都市はつくったかもしれないけれども、本当のまちができていない。でかいものはできるけれども、思想がない。でかいものができ上がることが思想になっているのです。自由な人間が集まってつくるのがまちです。日本には自由な人間がいんじゃないんですか。

みんな自由になつたみたいで必ずしも自由ではない。自由ということがわからないんじゃないですか。池田潔の「自由と規律」（岩波新書、一九四九年）という本があるけれども、イギリス人は自由と規律がどうやって共存していくかを、パブリックスクール時代から学んでいるんです。日本の場合は「規律があると自由ではない」みたいな自由ですから、まちでもムラでもない人間が出てきてしまう。「浮遊民」ですよ。でも、人間は集まって住まなければならないというのが基本なんです。

まちに関心を持つ市民を育てる

まちに関心を持つためには、景観はわかりやすい。景観は市民全体の共有のもので、誰のものでもないんです。だから、とっかかりとしてはいちばんいい。

日本で美観が初めて大論争になったのは、東京駅前に前川國男さんが設計した東京海上ビルが建つたときです。高層建築が林立するまちになってしまったのかというキャンペーンがされて、あのビルは上を五階分切つたんですよ。今は議論もありません、どこもそうやってしまっているでしょう。都市全体をどう描くかというところが抜け落ちてしまっているんです。

パリではエッフェル塔ができたときもポンピドゥーセンターができたときも、フランス人は大議論をした。日本ではあまりそういうことがない。

僕は住民と市民を分けているんです。不易ということでは、これからどうやって市民を不易なものとしていくかです。まず自分の環境に関心を持つ市民、自分以外のことに関心を持つ市民を育てなければ。関心を持たないと市民じゃないよ。

百年先の未来から現在の都市を考える

イギリスのある古いまちでは、いずれ取り壊すと云っていた景観の邪魔になる建物を、十年後に本当に取り壊しているんです。使えものにならない土地があるのでどうするかと聞いたら、「百年ぐらい経つとどうにかなる」と自治体の役人が平気で言う。

今のことを判断するのに今のことしか考えないのではだめです。五十年、百年先、あるいは三百年ぐらい先のことを考えて、今をどうするかを判断しなければならぬ。夢みたいなビジョンをつくるという意味ではないですよ。本当にやるつもりなら、三百年かけてもいい。五十年も経てば経済的な状況なんて全然違うんだから、できるんです。今できないと思うことも。

僕の都市論は、二十二世紀論です。二十世紀があつて二十一世紀があつて二十二世紀があるんではなくて、必ず二十一世紀中に大きな断絶がある。断絶の先の新しい文明を考えておかなければいけない。

手塩にかけてまちをつくる

おお
たか まさ と
大高正人

建築家

一九三三(大正十二)年、福島県に生まれる。東京大学大学院修了。前川國男建築設計事務所を経て、一九六二(昭和三十七)年、大高建築設計事務所を設立、現在に至る。千葉県文化会館、多摩センター中央地区、坂出市人工土地、故郷・福島県三春町での一連のまちづくりなど、半世紀にわたって数多くの建築とまちづくりに携わってきた。その建築の真髓は、個人による創作でなく土地の住民たちとの「共働」による創作にある。まちづくりに対する自らの姿勢は、住民とともに事業を組み立て何年も辛抱強く続ける「現場主義」だと言ふ。

佐藤 友美子 (さとう ゆみこ)

1975年立命館大学文学部を卒業、同年サントリー株式会社に入社。1989年サントリー不易流行研究所の設立メンバー、1998年3月より部長。不易流行研究所は2005年3月、サントリー次世代研究所に名称変更。次世代研究所は2008年3月31日サントリーの次世代育成支援活動の基盤を固めるための調査研究を行うという所期の目的を達したため解散。2008年4月1日より(財)サントリー文化財団の上席研究フェローに就任。『U35世代 僕と仕事のビミョーな関係』(編共著、日本経済新聞社)『時代の気分 世代の気分 〈私がり〉の時代に』(編共著、NHKブックス)『現代家庭の年中行事』(共著、講談社現代新書)『大人にならずに成熟する法』(企画編集、中央公論新社)



インタビュー風景 (中央右が高野氏、左が佐藤氏)

成熟し、人はますます若くなる

2008年5月21日 初版第1刷発行

編著者 佐藤友美子

発行者 軸屋 真司

発行所 NTT出版株式会社
〒141-8654 東京都品川区上大崎3-1-1 JR東急目黒ビル
営業本部 / TEL 03-5434-1010 FAX 03-5434-1008
出版本部 / TEL 03-5434-1001 <http://www.nttpub.co.jp>

装丁 Malpu Design (清水良洋)

印刷・製本 中央精版印刷株式会社

定価はカバーに表示してあります
ISBN978-4-7571-4186-5 C0034
乱丁・落丁はお取り替えいたします